魔孕学園怪奇譚　前編

彼についての話をしたいと思う。

彼は自らのことを「暗魔」と呼ぶ。暗い魔と読み、喰らい魔と詠む。ある経緯を経て、「人間」として生きることを選択した彼が、自らに付けた名前だった。

……彼の父親は人間だが、母親はそうではなかった。魑魅魍魎――いわゆる悪鬼・妖魔の類の化け物で、人を喰う鬼だった。

ふたりの出会いは偶然だったというほかない。腹を空かせた母の目の前に、たまたま現れたのが雉撃ちをしている途中の父だった。哀れというほかないのだが、父はその場で母に生きたまま喰い殺された。しかし、その直前、戯れとして、父と母は一度だけまぐわいの関係を持った。それは母が父を一方的に襲っただけの行為だったが、この時、父が内側からこみ上げてくる性欲に負けて放った精が種となって生まれるたのが彼だった。

悪鬼たる母は魑魅魍魎たちを率いる群れの長を務めていた。といっても、その集団は小規模なもので、率いられし妖魔の数は両手足の指で事足りた。時代は二〇世紀が終焉を迎えて二一世紀が訪れた頃である。世の闇は人工の灯りに敗れて衰退を続け、魔のモノにとってはまことに棲みづらい時代であったというほかない。妖魔たちは、人里離れた山の奥に棲みかを移し、鳥獣を狩り、草木の実を食み、時おり山の中に迷い込んだ人間を喰らいながら細々と生き延びてきた。

魔の母と人の父の間に生まれた半魔の彼は、母が率いし妖魔たちが棲み暮らす里で育てられた。母が群れの長であったからでもあるが、里で彼が迫害めいた所業を受けることは一度としてなかった。むしろ妖魔たちは新たな仲間ができたことを喜び、彼のことをまるで我が子のように扱い可愛がった。彼は人間の肉を喰うことができなかったが、そのことを責めるモノはいなか

った。

時が流れ、半魔の彼が生まれてから一〇年の月日が流れた。この間、世の闇が再び深くなることはなく、むしろ人間たちによる土地開発の影響によって、妖魔たちの縄張りは縮小する一方だった。妖魔たちの縄張りは鳥獣たちのソレと重なる。そのため、食料の確保に困った妖魔たちは、必然的に人間を襲う回数を増やしていくほかなかったのだが、これが致命的にまずかった。

山で行方不明になる者が増え、貪られた死体が多数見つかって、一部の人間たちが一連の事件は山に巣食う魑魅魍魎たちの仕業であることに気づいた。一部の人間たちは、決して口には出さなかったものの、昔から魔の存在を信じて疑わず、いまも化け物たちが静かに息づいていることを知っていた。ゆえに、妖魔を退治する術を身につけた者たちに助けを求めるにいたったのは、ある意味では必然の選択だったといわざるを得ない。

守部の一族と呼ばれる退魔師の集団がいた。数ある退魔集団の中でももっとも強い力を持つとされる退魔師の一族で、彼らに白羽の矢が立った。一族の長たる守部剛十郎を筆頭に、総勢一三人からなる討抜隊が結成され、山に巣食う妖魔を根絶するために、戦意を剥き出しにして山の中に入ってきた。

それから先は、凄絶のひと言に尽きる。魔の完全なる駆逐を目指す退魔師の集団と、己の生存をかけて戦う妖魔たちの戦いは、一昼夜に渡って繰り広げられた。肉が切られ、骨が断たれ、血や臓物が大地を赤く染め上げて、悲鳴や絶叫が大気を震わす。戦いは、決して一方的ではなかったが、この戦いで妖魔たちはそのほとんどが討滅され、生き残ったモノはゴミ溜めの中に隠されていた半魔の彼だけであった。

退魔師たちも深手を負った。戦いには勝ったとはいえ、八人もの犠牲者を出し、その中には長である剛十郎もいた。彼は妖魔たちを滑る雌の悪鬼と死闘を演じ、壮絶な戦いの果てに、相打ちとなって死んだのだった。

長と、多くの仲間たちを永遠に失って、怒り狂った退魔師たちは、憂さを晴らすかのように妖魔たちの死体を切り刻み、踏み潰すと、供養することなくその場に捨てていった。その様子をゴミ溜めに隠れていた半魔の彼は息を

殺してジッと見つめていた。
やがて退魔師たちが去り、夜を迎え、辺りが静まり返った頃、ゴミ溜めの中から彼が這い出てきた。彼は泣いていた。無惨に殺され、切り刻まれた仲間たちの哀れな姿を見て、滝のように涙を流していた。
悲しかった。しかし、その心に渦巻いていた感情は、それだけではなかった。
彼は首だけになった母をギュッと抱きしめると、大きく口を開け、かぶりついてソレを喰らった。母だけでなく、辺りに散らばっている仲間たちの屍を、彼は貪り喰いまくった。
屍を喰らうつど、身体に異様な変化が訪れた。まるで人間の子どものように小さな身体が、ゆっくりとだが、確実な巨大化を遂げ、まるで大人のソレと見まごうばかりの成長を遂げたのである。着ていた麻の衣服がビリビリと破れ、発達した筋骨が剥き出しになったが、半魔の彼は気にも止めなかった。
「……いまにみていろよ」
自分の変貌など気にもせず、仲間たちの死肉を喰い続けながら、彼は涙を流しながら呪詛の言葉を口にした。
「いまにみていろよ、退魔師どもめ。絶対、絶対に、俺がおまえたちを地獄に落としてやるからなッ！」
憎悪の炎を両眼にたぎらせながら、彼は己の敵となる存在を脳裏に思い浮かべた。
守部の一族。
こいつらを根絶やしにすることを死んだ母と仲間たちに誓い、彼は山を下りた。
そして一〇年の月日が流れる。

＊

……一〇年前のあの日、退魔師たちに殺された母と仲間たちの死肉を喰

らった後、彼は山を下りて人間の世界に足を踏み入れた。

「・・・・・・・・!」

驚愕で、最初は言葉が出てこなかったのだ。野山の自然が世界の全てだった彼にとって、人間世界は異質で、理解に苦しむ物で溢れかえっていたからだ。

アスファルトで舗装された道路、鉄筋コンクリートの建築物、張り巡らされた電線網、行き交う車の数はばかばかしいほどの量だった。里に居た頃、「教育」の一環で人間世界にある物はある程度知っていたが、実際に目にすると圧倒された。しかし、すぐに慣れた。慣れなければならなかったから。今後は野山ではなく、ここで生きていかねばならないのである。怖気づいている暇などなかった。

退魔師たちへの復讐を果たすためには力がいる。彼は夜の闇に紛れ、人間を襲い、その肉を喰らった。母や仲間たちを喰らった影響によるものだろうか。以前は食べることができなかった人間を喰らうことができるようになっていた。姿形は人間のソレと同じでも、彼の内面は、もはや化け物のソレと化していたようである。人間を喰らうつど、彼は自分が強くなっていくのを実感していた。

人間への襲撃を繰り返すうちに、彼はひとつの知識を得た。それは金銭に対する理解だった。彼に襲われた人間たちは、命乞いをする時、言葉と同時に決まって金をも差し出してきた。最初は単なる紙切れと金属片だと思っていたが、人間たちの金銭に対する執着ぶりを目の当たりにしているうちに、金は命と同じ価値を有していると理解した彼は、金に対する知識を深めるようになってゆく。そして、人間の世界では金の力こそがものをいうことを学習した。そのことを理解してからは、彼は積極的に金を集めることにのめり込んでいった。

金を集め、それを使い、その力の凄まじさを改めて認識した。せざるを得なかった。金があれば食い物に困らず、寝る場所に困らず、なんでも買えた。人間としての身分を手に入れることも容易だった。金の力は絶大で、その真

価を思い知ったのはそれからしばらく経ってからだった。
人間世界における彼の行動は「無差別連続強盗殺人事件」として世間の関心を集めていた。犠牲者から金品が強奪されていると判って、最初は金目当ての通り魔的な犯行かと思われたが、被害者たちが一様に貪り喰われていたことから、この事件が人の手によるものではなく、魔の存在によるものと気づかれた。
ゆえに、元凶である彼を討つために、退魔師が雇われて送り込まれてきたのは、ある意味では必然といわざるをえなかった。
送り込まれたその退魔師は、守部の一族の者ではなかったが、充分に――否、それ以上に強い力を持った退魔師だった。
殺意を剥き出しにして襲ってくる退魔師に対して、彼は全力でもって迎え撃ち、抗ったが、駆け出しの未熟な半魔と熟練の退魔師とでは力の差は歴然だった。彼は退魔師の強さに圧倒され、追いつめられてしまったが、この窮地を救ったのが金の力だった。
彼は、自分が殺してきた人間たちと同じように、持っていた有り金すべてを差し出して、退魔師に対して命乞いをしたのである。無駄な抵抗だと思ったが、差し出された金の量を見て、退魔師の態度が一変した。なんと、退魔師は、それまで放っていた殺意の波動を消して、「見逃してやるから金を置いて消え失せろ」と言ったのである。
屈辱的だったが、ホッとした。
辛うじて生き延びた彼は、この一件以降、自らの行動を抑制して慎むと同時に、さらに金を集めることに邁進した。
人間の世界には、自然界とは異なる闇の世界が存在していた。悪意と、殺意と、害意を携えた、人でありながら外道に身をやつした者たちの間に紛れ込んで、彼は金を蓄えた。自分が化け物だと気づかれぬよう、慎重に力を使いながら、麻薬を売り捌き、武器を仕入れて高値でバラ撒き、捕まえた女に身体を売らせ、敵対する組織を潰し、貧乏な人間に金を貸し付けて、高い金利で相手が死ぬまで利息を搾り取った。

金が集まり、その金を目当てに人間どもが媚びへつらって集まってきた。みな、人間世界のはみ出し者のクズばかりだったが、彼は彼らを重宝した。餌として扱うためにである。

彼は退魔師への復讐を果たすため、利用できるモノはなんでも利用するつもりだった。

数が少なくなったとはいえ、人間世界にはいまも魑魅魍魎たちが潜み棲んでいた。その彼らを呼び寄せて下僕とするために、彼は自分の下に集った人間たちを「餌」として振る舞った。

血と、肉の臭いに誘われて集まった化け物たちは、旺盛な繁殖力だけが取り得の低い知能しか持たない下級妖魔たちばかりだったが、それで充分だった。彼らの力は決して強くはなかったが、「数」という特性を持ち合わせていたからだ。

めまぐるしい勢いで時間が流れていった。

表と裏、両方の世界で力を蓄える作業に、彼は二年の時間を費やした。

金を運用する会社を興し、莫大な富を手中に収める一方、集まった下級妖魔たちを繁殖させ、蟲毒の法を用いてより「強い」妖魔の生成に力を注いだ。そして、己を鍛え上げると同時に、書物を読み漁って貪欲に知識を吸収した。

金の力が、貴重な書物の入手を可能にした。「ネクロノミコン」「エイボンの書」「エメラルドの陶片」「エルトダウン・シャーズ」「黄衣の王」「ガールン断書」「ナコト写本」「ポナペ教典」「クタート・アクアディンゲン」「グラーキの黙示録」「サンの七秘聖典」「屍食教典儀」「ドジアンの書」などの原書や写本を、金の力に物を言わせて買いまくった。そこには古代世界の魔術や、西洋文明の外法、禁術、失われた神々の知識などが多分に書かれており、それらを我が物とすることで彼はさらに強くなった。

「さぁ、準備は整ったぞ」

力を欲し、求め、手に入れ、蓄えることに成功した彼は、いよいよ行動を起こすことを決意した。自らの復讐を果たすために。そして、自分が「巣」とすることを決めていた場所へと足を向けたのだった。

私立魔孕学園。

人里離れた山の中にある全寮制の学園で、多くの生徒を抱えながらも、デリバディブ取引きに失敗して多額の損失をだし、経営不審に陥っているこの学園を、彼は前々から自らの「巣」とすることを決めていた。

都会の喧騒を離れて自然な環境下での教育を――という理念の下、陸の孤島のような場所に建てられたそうだが、交通の便も、通信状況も悪いとあっては、何かあった場合、すぐに助けを呼ぶことができず、また助けにも来ることができないというわけだ。

それは、悪意を携える者にとっては理想的な環境というほかなかった。

この学園を完全に掌握し、自らの領域とすることができれば、退魔師どもを引きずり込み、各個撃破することも可能なはずだ。学園には多くの女子生徒たちが在籍しているから、彼女らを苗床として下級妖魔を繁殖させれば、ほぼ無限の戦力を得たも同然といえるだろう。

学園は現在、経営を建て直すため、スポンサーを募集している最中だった。経営を建て直すために必要な額は最低でも五〇億円と言われており、金融機関でも簡単に融資することは不可能に近い金額である。

しかし、彼には金があった。闇の世界で蓄え、国内外の金融機関を通じて浄化した見た目だけは綺麗な金が山のようにある。これを使って、学園の経営権を手に入れる。そして時間をかけてゆっくりと我が物とするのだ。五年、いや八年はかかるかも知れない。だが、それでいい。焦りは禁物だ。気づかれぬよう、悟られぬよう、ゆっくりと我が物とするために。

確固たる悪意を携えて、彼は学園の門を潜った。

「私、先日連絡をいたしました暗魔誠一と申します。理事長様はおいでしょうか？」

続きは本編にてお楽しみください